

書評

マリオン・ロバート著

農家の主婦

Marion Roberts: *Farmwife*, 1952

井出 よ さ へ

戦後実施された民主化諸政策のなかで、婦人の社会的地位の改善と農地改革との二つの諸政策のかさなり合う対象として、農村婦人の生活と地位とが世の注目を浴びたが、はなやかにしてはやされることと、問題が実際に解決されることは必ずしも一致しない。わが国の農村婦人問題研究は、従来、婦人の過重な農業・家事労働と家庭における余りの地位の低さを問題として来たが、どちらかというところ、その現実を把握し、分析するというよりは、むしろ、その原因としてのわが国農業経営の特殊性、農村社会の封建的性格を強調するのに急であるようである。僅かながら存在する農村婦人についての資料文献はこのような内容が多く、したがって、官庁・研究機関・学者などの筆によるものである。戦後も改革の波に乗って、農村婦人の労働と生活についての調査研究が盛んとなったが、従来と同じこの傾向の上に立つものが多い。おそらく、農村婦人のなかから自分の生活を反省し記録する者が多く出るようになるのは、その生活と地位に対して飛躍的な改善が実施された後であろう。

書評・マリオン・ロバート 農家の主婦

ここに私が紹介しようとするものは、ウェールズに任じ一農家の主婦が多忙な家事の間に筆をとった生活記録であるという意味でユニークであると同時に、農業を家業とする一家庭の変遷を長期に渡って画いているという意味でもまた興味深いものである。

初めにこの著者の家の農業を浮び上げらせるために *Encyclopaedia Britannica* と営農改善課訳『躍進する英国農業』を用いて、ウェールズの農業についてごく大ざつばに述べる。

山地で降雨量が極めて大であるウェールズは牛乳と食用肉の生産が主で、土地の三分の一は荒地と、牧野と、沼地でこれらは牧羊場として利用されている。降雨多量のため危険な小麦作は総て河沿いの谷間にかぎられ、全耕地の五パーセントにすぎない。大麥と燕麥はかなり普及しているが、後者は千から千五百フィート以上の高地では、多收穫をもたらすのは難かしい。家畜の飼養に必要な根菜類が残余の耕地を占め、ウェールズで飼育された家畜は大量にイングランドの収畜業者に販売され、より肥沃な低地で急速に太らされる。平均面積は約四十七エーカーでイングランドと併せて農業者の三分の一が自作農であり、三分の二が借地農である。主人・妻・大きな子供たちが近所の臨時雇とともに全作業を行つている。なお、北ウェールズの火山地帯は景勝の地が多く、著者の家も溪谷の美で有名な *Cader Idris* への途中にある。

マリオン・ロバートは一九〇〇年生れ、父はウェールズ育ちで

あるが母はヴィクトリア時代風のイギリス淑女であつたらしい。彼女はウェールズ育ちではない。青年時代までリパブルで過している。普通の勤勞婦人として、「ダンス・トラップ・映画・演劇に明け暮れるはなやかな」(四頁)都会の空氣も充分味つた。教育としては働きながら夜学で技術学校の美術の講義をきき、次に美術の学校へ行つてゐる。戦時の軍隊生活のため職を失つた義兄が、一九二二年都會を離れ北部ウェールズの山村に借地農として入ることになつたので、母とともに出發する。この農業の計画は失敗するが、土地への愛着のために彼女は小屋を借りて母と二人ふみ止まる。彼女が再び農場に住むようになつたのは十二年程後のことである。彼女は結婚して、夫は農家に生まれ農家に育ち生涯の殆どを農業をしてゐた人である。数年間にわたり懸命に小金を積立て適當な農場を探していたが、Brightonに農場を借りることになつたのは、三番目の子供の誕生後の一九三六年の春であつた。一九三八年末子が誕生し四人の母となり夫と母と併せて七人家族を成す。第二次大戦下の配給制と疎開受入を経て平和を迎える。一九四七年二月に老母を失ひ、秋に長女はケムブリッジ大学に入学のため家を離れ、長男は町へ大工の徒弟となつて巣立つて行く。

このような輪廓の上に、ロバート家の農業のあらましを述べたいと思う。

もともとこの本は文学的な表現で記録されたものであり、又ど

ちらかといへば家庭生活の変遷に重点をおきその背景として農業を描くという形であるので、年次を追つて正確に経営の変遷経過を迎えることが出来ない。ほぼ正確に分るのは、開始当初の狀態と一年の農作業のうつりかわりである。農業をはじめた一九三六年は農作物の価格が非常に低く危険な時であつたが、農具や家畜の価格も低かつた。資本金は二百ポンドで百ポンドが自分のものである。購入した主な農具とその値段は次のようである。

中古刈取機 四ポンド 一〇シリング
畜力草刈機 一七シリング 六ペニ
荷車 三ポンド
牧草運搬車 三ポンド 十シリング
プラウ 一ポンド

ロバート家の農場は五〇エーカーで、ウェールズで五十エーカーでは余り多くの家畜を飼養できない。山ぎわの放牧地は乳牛四匹、若い牡牛・牡牛・併せて八匹、犏五匹計十七匹ぐらいがせいぜいといふところである。この外に馬一頭(耕作用)豚一頭か二頭、鶏三〇―四〇羽、あひる二羽を飼う。羊は適當な山地がないため飼育しないが、十月初旬から四月初旬へかけて山地から降りて来たものを預る。凡そ七〇匹の世話をする事が出来、一匹について最初は五シリング、後に値上りして十六シリングを報酬として得た。畑は六・七エーカーで、この他に裏庭に自家消費用の野菜畑兼果樹園四分の一エーカーがある。

農作業は夫のエドワードが筆配を揮ひ勞力の点でも中心になつ

てやるのだが、一年中休みなしに続く。冬の間は屋内にいる家畜にかいばや水をはこび、小屋の掃除にも相当の間がかかる。その間に肥料を畑に運び畑に溝を掘る。二月には土地を鋤きはじめほとんど全部の畑に施肥が行われ、次は種まきで、絵にかかれたようにすべて手でやり土地を耙でならす。三月下旬のイースター休みにはじやがいもを植付けをし、四月には預つていた羊が草を喰べつくし山へ移動する。他の家畜も小屋にいる時間が短くなるので掃除が楽になる。五月は草刈機が故障になるのを防ぐため石拾いをする。六月にはそろそろ草を刈りはじめ、七月はひまがあらばエドワードは近所の羊の毛を刈る手伝をする。八月のはじめまでに草を刈り運び入れ、ついで敷わら用のしだ類の刈り取りを早めにやる。燕麦と大麦の刈り入れが九月で、十月には脱穀であるが、その間にひまを見て人参・根菜・じやがいもなど根菜類をほつて貯える。

普通、農村婦人問題というと、農作業と家事労働の関聯・分離の度合が問題になるが、農作業への主婦の参加の度合はこの場合どの程度であるかを見ると、これも正確には出ていないが、熟練を余り要しない草刈り、搬入、根菜掘り、石拾い、刈入には参加しているが、家畜飼養に関する作業には参加しないということが云い得る。この著者は搾乳も殆どやらない。家畜飼養・農作業を通じて宰配を揮うのは夫であり、経営の根幹をなす家畜の販売・購入などは絶対的に夫の判断によつてゐる。著者が農民として言

つたのでないから、この行き方はこの地方の典型ではないかも知れないが、一つの傾向を表わしているのではないかと思う。夫のエドワードがじやがいも掘りなどに機械を使うのを好まないなども、農民のタイプを物語るものであろう。

全文を通じて、著者の興味はやはり農業よりいわゆるホームメーキングに傾いているようであるが、この面の労働―家事労働―もやはり都会のように単純化されてはいない。週二回はパンとバター造りという大仕事が控えて居り、また夏には多に備えて果物の瓶詰とジャムをつくる。葡萄酒も自家製造である。季節によってはペンキ塗りもやり、カマドは旧式だから黒鉛をひかねばならず、大ぜいの食器洗い、衣類の修繕・洗濯に追われる。その上、この著者の場合、子供に充分な教育をさせて行くための収入を得るには *Cedar Ridge* に遊びに来る人たちにお茶と簡単な食事を賄い、週末旅行の宿泊の世話までしている。彼女が文章を書くようになったのも最初は収入を増やすためのものであつた。

先に私は農作業の面での主婦の参加の度合と発言権について述べたが、家事の面でこれを見ると、魚を買うにも男に聞くというわが国の場合と違つて、消費面の宰配は、例えば家具のようなものまで主婦の判断の下に置かれてゐるようである。そしてわが国の場合農作業が家事作業の時間にまで押し入つてゐるが、この著者で見る範囲では、主婦にとつてはやはり家事労働を主とし農作業を従とすることが充分に許される余地がある。わが国の場合農作業が家事作業の最低の余地さえ失うばかりでなく、生理的限

界をも超えることは産前産後の休養一日きりなどという事例によつても知られるが、この著者は産前産後六週間の休養が出来、入院中家には家政婦を置くことが出来るなどは、まさに驚異的である。産前産後の休養に關聯して、家族關係について見れば完全に著者の場合夫婦中心である。

農村婦人にはリクリエーションがないとよく云われるがこの場合どうであろうか。子供が映画を見に行くのが年一回であり、年とつた人たちが社交を非常な楽しみにすることから都会のようなリクリエーションはたしかに少いと、える。ただ著者が仕事の暇な時に、子供たちを連れて見学や遠足に行き視野を広げ自然の美を楽しんでいるのは、形をかえたリクリエーションであると思う。刺繡や読書は入院でもしないと出来ないと思つてゐる。

この本は一九三八年から *Farmers' Weekly* の投稿者となつた著者が、随想風に、エピソードを重ねて折にふれての感想や家の歴史とウェールズの自然を書こうとしたものと云えよう。この間を縫つてウェールズの農村の婦人の問題を系統的にくみとることは困難であり、本書の著者のように都会育ちの、しかもただ一人の婦人の例から全体を論ずることは不可能である。しかし、本書によつて農村婦人問題研究の数々のヒントを得ることは可能である。

だが、この本の一番の価値は、たとえそれが限られた個人の生活体験の記録であつたとしても、私が最初に述べたように、「農村婦人が自分で書いた生活記録であること」にあると私は思う。